

## Beirut 便り

山田圭吾（大阪赤十字病院 救急科医師）

レバノンにおけるパレスチナ医療支援事業の活動報告です。昨年に続き、2度目の派遣となりました。1度目の派遣報告では、パレスチナ人を取り巻く環境や、医療支援事業の詳細を報告しました。こちら是非ご覧ください（派遣活動報告は、大阪赤十字病院 国際医療救援部のHPから閲覧可能です）。今回は、私たちの活動内容をもう少し掘り下げて、Q&A方式でお話しましょう。

### Q. 今回赴任したハムシャリ病院での活動内容、地元スタッフの反応を教えてください。

ハムシャリ病院の事業計画は以下の通りです。

- ① 救急外来でのトリアージ（重症度評価）の導入
- ② 新しい救急外来診療録の導入
- ③ 標準的外傷治療手順の導入
- ④ 既存の治療手順の改訂と実践
- ⑤ 多数傷病者搬入時計画の作成
- ⑥ 広報活動

このうち、⑤はハムシャリ病院で新たに始まった項目です。武力衝突などによる多数傷病者の搬送事例を想定した大規模訓練です。オランダ赤十字が主体となって行う事業で、非医療者による院外救助活動も含めた大掛かりな計画です。日赤は救急室対応の部分をサポートします。Haifa 病院での一年間の活動の成果が現地でも高く評価されたこともあり、ハムシャリ病院でも日赤の事業には大きな期待が寄せられていました。

### Q. 前回活動されたハイファ病院と今回活動との相違点を教えてください。

一番の違いは活動期間です。ハイファ病院では今後5病院での活動を見据えた事業調査の意味もあり、1年間の支援になりました。残る4病院の活動期間は半年間としています。前述のように、ハイファ病院で得られた成果が他の4病院にも伝わっているためか、日赤に対する期待と要求は早期から比較的高いと感じました。限られた時間の中で、事業計画の質を保ちつつ活動を続けるためには、事業計画の各実施項目に優先順位をつけて臨む必要があります。また、ハムシャリ病院の活動計画の中には、他国の赤十字社と協力を要するものが含まれています。多くの姉妹社と共に活動を行うことは、日赤の活動を広く発信できる機会でもあると考えています。

もう一つの違いは、病院の規模です。ハイファ病院は小規模病院でしたが、ハムシャリ病院は5病院の中でも最も大きく、ICUや透析室も備えています。CT検査も可能であり、救急診療の対応の幅も大きいです。スタッフの数も多く、経験値の高い医療者も多くいます。搬送症例も多く、支援に求められるニーズは自ずと違ってきます。例えば提供した講義の質、量が物足りないという声が挙がる場合があります。ハイファ病院での成果を鵜呑みにせず、定期的にニーズを振り返りながら事業を進めました。



ハムシャリ病院

### Q. 派遣中の生活ではどんなことを心掛けていますか。

3つあります。まず体調管理です。OnとOffとをしっかり分けるようにしています。忙しい時こそ休む

時間をうまく確保するようにしています。料理は得意ではないので外食に偏りがちですが、3度の食事をできるだけバランスよく摂るようにしています。好きな読書に没頭する時間が取れるのもありがたいことです。しかし、どういうわけか、日本の救急室で働いているときよりもこちらにいる時のほうが、体調がよいように思います。

2つ目は事業についてです。この事業はその性質上、プロセスから結果まで、どこをとっても成果が見えにくいと感じています。普段から進捗状況を“見える化”することをチームの目標に掲げています。例えば、事業計画ごとにターゲットとするスタッフを明確にして、個人レベルで理解の程度を確認します。講義の出席率がよくないスタッフには個別指導や追加講義で理解度の向上を図ります。会議は議事録を共有して、どこまで達成できたか、次のステップでいつまでに何が必要かを共有します。自分たちが今どこに立っているのかを、常に確認するようにしています。

最後に、こうした経験をできるだけ発信していきたいと思っています。大阪赤十字病院の国際医療救援部ではFacebookで随時に活動報告が掲載されます。パレスチナ人キャンプの現状が、できるだけ多くの人の心に触れる機会になればと願っています。皆さんも覗いてみてください。

#### Q. ハイファ病院とハムシャリ病院で、活動がうまくいく可能性を感じたエピソードはありますか。

ハイファ病院：支援病院の中で一番小さく設備の乏しい病院でした。気胸（肺から空気が漏れる病態）の患者さんの治療で、胸壁に局所麻酔をして細いチューブを留置する手技があります。日本であれば練習用のマネキンを使いますが、私達はキャンプ内の肉屋さんに頼んで、子羊の胸壁を分けてもらって使いました。講義は大変盛況で、これを境に参加者の意気込みが変わったと感じました。事業に対する日赤チームの本気度が伝わったと思っています。物資の乏しい環境で工夫が実ったことも自信になりました。

ハムシャリ病院：講義で困るのが言葉の問題です。そこで、救急スタッフ向けの講義を救急部長に行ってもらいました。資料はすべてこちらで作成したものを共有し、事前に通訳さんと一緒に内容を打ち合わせした上で、アラビア語で講義をしてもらいました。当然ながら、講義の理解度が全く違います。また、質問も飛び交う中で演者側の説明にも大変に熱がこもり、思わぬ相乗効果を生みました。この講義形式が上手くいったことで、院長先生から今後も講義は若手医師にさせてはどうかとの提案がなされました。お互いに教え合う形です。資料は日赤チームが作成して共有します。若手医師らにも快く応じていただき、以後の講義に取り入れています。言葉の問題だけではなく、日赤チームが去った後の事業の継続性という意味でも大変に意義深い試みになったと思っています。



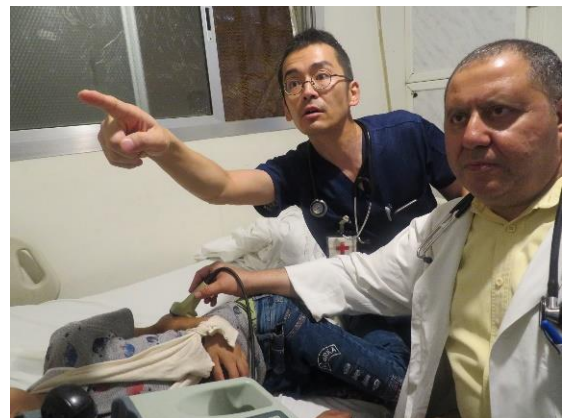
#### Q. 活動が難しいことを痛感させられたエピソードはありますか。

ハムシャリ病院は支援病院の中で最も大きな規模の病院です。医療スタッフも、症例数も多いです。病院の管理者側は、診察のための新しいガイドラインを設けたり、カルテの記載率を上げたりすることで診察の質を高めたいのですが、多忙な中で新しい流れの対応を強いられるのは若手医師達です。数も多いため、フラストレーションは伝播しやすく、団結した大きな声となって日赤チームに跳ね返ってくることもあります。なぜ変化が必要か、先にあるメリットは何か、足りないもの

はなにか、補えるものはなにかを繰り返し問いかけます。また、管理者側と救急現場側の両方の意見に粘り強く耳を傾ける必要があります。そして、活動に協力してもらうためには、以前にまして“共に汗をかく”姿勢が必要です。普段の臨床や夜勤など、できるだけ現場で時間を共有するようにしています。

**Q. 今後の活動でポイントとなることは何でしょうか。**

継続性をいかに保つかということが一つのポイントになると思います。今回の事業では、診療現場のシステム作りに取り組みました。複数の患者さんが受診した際に、まず患者さんの重症度を評価して優先順位をつける試み、すなわち“トリアージ”です。次に、外傷患者さんに対する診察手順を一本化しました。そうすることで、診察の質の個人差をできるだけ少なくし、見落としを減らすことができます。最後に、カルテ記載をして診療行為を記録に残すことに取り組みました。問題は、導入したシステムが日赤の事業が終わった後も続くかどうかということです。そのためには、現地の医療者自身がその必要性を理解し、自分たちで成果を確認しあえるようにしなければいけません。そのためには、普段から当事者意識を持ってもらえるような取り組みかたにする必要があります。先ほど述べた、現地のスタッフ同士で教え合う形などは、一つの理想形だと言えます。



**Q. 日本の機関がレバノンやガザの病院支援に入る意義はあるのでしょうか。**

海外派遣の仕事に携わるようになって、日本に対する信頼の高さということを感じています。仕事に対する熱意、細かな計画性、積み重ねる忍耐力、そして根底にある“和を重んじる精神”。それは、こうした特性を生かしながら今までに多くの日本人が良い仕事を少しずつ積み重ねてきた中で勝ち得た信頼だと思います。具体的な活動内容以前に、そういった信頼を勝ち得ていることは大変に大きなことです。

また、日本という国は中東から見て遠く、この地域特有の様々なしがらみから少し離れたところにあります。お互いに懐を開いて、何かを対等に話し合う相手としては、比較的受け入れやすいかもしれません。

病院支援の意義ですが、私は日本の機関が病院支援に取り組む意義はあると思います。現地での医療支援、特に教育や技術移転といった事業は、すぐに成果の出るものではありません。種が育って実をつけるまでには、それこそ計画性と粘り強い忍耐力、そして思いやりが必要です。こうした長期展望を見据えた地道な取り組みというのは、日本の得意分野であるように思います。そしてなによりも、現地の人々との確かな信頼関係の中でこうした取り組みが行える国や機関というのは、そう多くないようにも思います。もちろん、そのためには私たちが提供する教育や技術の信頼度が、現地の人々の期待に添うものであるように、高い水準に維持しておく必要があります。

以前に赤十字活動としてガザで働いていた時に、若い医師から受けた質問が心に残っています。“日本人は戦争や自然災害の苦しい経験をどうやって乗り越え、そして克服したのか”というものでした。日本という国は、度重なる苦しい経験を乗り越えて、大きな発展を遂げた数少ない成功例だと思います。日本の復興の足跡は、この困難の中に立つ彼らにとっての希望の光であるのかもしれませんが。政治的に不安定な環境に

置かれながらも、彼らは高い情熱と誇りをもって業務に従事しています。私達にできることは限られていますが、今後もお互いに高め合いながら支援を続けていきたいと思っています。